愛

Ａブロックにエントリーされた全１２作品を公開します。

最後の覇者となったのは果たして誰？？
http://www.columnland.net/　にてごらんください。

A-1

逢・愛・哀

沈んだ気持ちでバスに乗ると、時間が早いからだろうか、珍しく乗客は一人もいなかった。どこか寂しげではあるが、今の私にはちょうどいい。ほぼ定位置でもある一番後ろの席の窓側に私は座った。

ふと横を見ると、バスの中と外の温度差によって窓ガラスが曇っていた。私は何の気なしに線と点の顔を描く。その表情は笑み。

「……何をやってるんだか」

ついさっきフラれたばかりなのに、と私は自嘲的につぶやく。

先輩に彼女がいることは知っていた。それどころか、二人がいつも一緒に登下校していることや、文化祭のベストカップルにまで選ばれたことがあるのも知っていた。

絶対に、敵うはずのない相手だとわかっていた。

最初から、叶うはずのない恋だとわかっていた。

それでも、せめて気持ちだけは伝えたくて。

「ホント、何やってるんだろうな、私ってば」

とたんにむなしくなった私は、窓ガラスに描かれた顔を消そうとし、

「あ、あれ？」

ガラスに映る私の目から、一筋の涙が流れているのに気付いた。

「おかしいな。なんでだろう」

――悲しくなんて、ないはずなのに。

そう、悲しいはずないのだ。だってフラれることは最初からわかってたんだし、それに、それに……

限界だった。むしろここまで泣かなかったのが不思議なくらいだ。

堰をきったように流れ出す涙。微かな嗚咽が漏れる。

悲しくないはずがない。初めての恋が終わったのだから。それでも気丈に振る舞おうとしたが無理だった。

周りに誰もいないのは不幸中の幸いだった。こんな姿、誰にも見られたくない。

私は静かに、泣き続けた。

窓ガラスに描かれた顔。車内の熱気でくずれたその目からこぼれた水滴は、まるで涙のようだった。

A-2

White Month Festival

雪に全てが吸い込まれていくような静寂の世界で、わたし達の呼吸の音だけが大きく響いている。白い風景の中、わたし達は舞台に立ち、始まりの時を待っていた。

始まりの合図が空を流れ、わたし達の最後の演奏が始まった。

雪に溶け込むような音色が次第に力強く変わっていき、わたしの歌を迎えてくれる。メロディーは優しく、その中で歌う歌はとても心地良い。その歌に、この半年間の全てを織り込んでいく。

曲調が変わり、急に静かになる。音色がぽつりぽつりと消えていって、わたしの歌と…あの人の伴奏だけになった。わたしには言葉で伝える勇気なんてないから、せめてこの歌にわたしの恋の気持ちを込めたいと思う。『好き』を言の葉とともに、歌にのせて流した。

そんなフレーズもやがて終わりを告げてしまい、消えていた音色が戻ってくる。全てはフィナーレに向かって動き始めた。

わたし達の演奏は始まりと同じように雪に消えていく。音色の余韻だけが世界を包みこんだ。

演奏が終わり、舞台を降りる。そのとき、何かが擦れて、きゅっと鳴いた。それを聞いたとき、何故だか泣きたくなった。達成感とともにわたしの中にいる何かが、大きくうごめいている。

それから間もなく、わたしより一つ年上だったあの人は、学校を卒業して遠くへと旅立ってしまった。

季節は移り変わり、梅雨が訪れる。雨の音に全てがかき消され、賑やかな静寂が広がっている。それはわたしがあの人と出会った季節、そしてあの人に近づこうとありったけの勇気を振り絞った季節だった。

「まだ後悔してるの？」

突然友達に声を掛けられ、はっと我にかえった。

「そんなこと…ないよ。」

そうは言ってみるものの、言葉に力が入らない。

「だって、夢に向かって歩き出そうとしてるのに、待ってなんて言えないよ。」

耐えられず、本音がこぼれる。

「でも、やっぱりこんなの、いやだよ。もう一度、会いたい。」

瞳が少しずつ潤んでいくのが自分でもわかった。

「ほら、我慢しないでいいって。」

彼女の優しさが心地よかった。そして、泣き声は雨が優しくかき消してくれる。

思いっきり泣いて、少し心が落ち着いた。

「やっぱり先輩のこと、まだあきらめたくない。」

新たな決意のように、そう宣言した。

「そっか、うん。がんばれ。」

明るく背中を押してくれる。

「そうだ。じゃあ、応援の言葉として一つ、伝説の話でも…。」

それは、『白月祭』の再会の伝説。彼女が届けてくれた言葉はわたしに期待を与えてくれる。だから、信じたいと思った。

奇跡は、白月祭の夜に訪れてくれた。今、あの真っ白な世界に大きな絵を描き始めたい。大きな、恋の絵を。

だから、今、最初の線を描こう。

Dreaming Lovers

彼の腕を枕にまどろむ私。
私の髪を指に絡めて遊ぶ彼。
そんな二人きりの時間が心地よくて、つい顔が綻ぶ。
「ん？どうした？」
「ううん。なんでもない」
こんな小さなやり取りすら、とても愛しい。
こつんとおでこを彼に預けて、心の中で愛の言葉を囁く。
彼にも言って欲しいけど、口に出すのは、ちょっと恥かしい。
だから、その胸板に、指先で文字を描く。
「今、なんて書いたかわかる？」
「え？あぁ、ごめん、もっかい書いて」
彼との思い出をなぞるように、指を動かす。
「あ？」
「うん。じゃぁ、次ね」
初めて手を繋いだ日のこと。
「い」
初めてキスをした日のこと。
「し」
初めて彼と愛し合った日のこと。
「……て」
どんな宝石よりも、輝いてる。
「……」
「ん？どうしたの？わからなかった？」
「……る」
「はい、じゃぁ繋げて言って？」
「……」
眼を見つめる。
逸らされる。
「きゃっ」
無言のまま、私の頭をくしゃくしゃする彼。
「ちょっと何す」
唇に触れた柔らかい感触が、私を黙らせた。
まるで、夢を見ているかのようなふれあい。
今まで、何回もしたことあるのに。
「んもぉ」
どうして、まだこんなにドキドキするんだろう。
恥かしさを誤魔化すために、力いっぱい彼を抱き締める。
そうやってはにかむ私の耳元に、彼は口を寄せて。
「愛してる」
思わぬタイミングで届いたその言葉。
ったく、相変わらず意地悪なんだから。
こっちは恥かしくて死にそうなのに。
でも、そんなところも、好きなんだもん。
「うん、私も、愛してる」
そう言うと、また二人で一緒に夢を見た。
今までで、一番長くて、一番甘い、最高の夢を。

『正直者のおじいさんの災難（正直者は救われない？）』

あるところにおじいさんとおばあさんが住んでいました。ある日、おじいさんが斧で木を切っているとおじいさんは手を滑らせて斧を近くの池に放り込んでしまいました。すると、なんということでしょう。池から見目麗しい女性が現れたではありませんか。おじいさんが目を丸くしていると池から現れた美しい女性は言いました。「あなたが落としたのはこの金の斧？銀の斧？それともこの使い古した斧？」おじいさんは正直者だったので素直にこう言いました。「そんなことより！ねえねえ君いくつ？君かわいいねえ。いや、ただかわいいだけじゃなくて美しくもある！君の魅力に僕はもう虜さ！とりあえず、その辺の茶屋でお茶しない？」そんな素直で助平なおじいさんにあきれたのか、そのかわいくて美しい女性は池に帰っていきましたとさ。さて、おじいさんがナンパに失敗してうなだれていると、後ろから肩をたたかれました。振り返ってみると、また女性が現れました。でも、そこにいたのは昔は綺麗だったけど、最近ではしわだらけの、しかも今現在は鬼の形相でいて手には鉈を持ったおばあさんでした。「今の女の人誰？」とても怖いです。「し、知らない人だよ…あ…はは…いや～親切に斧を拾ってくれたんだよ。」「それで？斧を拾ってくれたはいいけどあなたが変なことを言うからあきれてそのまま持って行かれてしまった…と？」おじいさんはこのときやっと斧がないことに気づきました。「…あなたは嘘はついてないのよね？」そりゃそうです。嘘をつくのは意地悪じいさんの役目です。「そう、じゃあ私の見たことは全部本当なのね…。」そう言うとおばあさんはおじいさんの目の前で鉈をすっと振り上げました。ひっ、と声が聞こえましたが構わず鉈を…池に放り込みました。おじいさんがぽかんとしていると、さっきの女性がまた現れました。「あなたが落としたのは…」「そんなことより！さっきあなたが奪っていったものを返しなさい！夫の斧と…私への愛情…」（おじいさんちょっと感動）でも、「それはできません。斧はともかく、元々あなたへの愛情なんてあの人は持ち合わせてはいません。」（ちょっ！）「嘘よね？」「…ほんと」話の都合上、嘘はつけません。「じゃあせめて鉈は返しなさい。」おばあさんは鉈を返してもらうと今度こそ、容赦なく鉈を振り下ろしましたとさ。

A-5

玄関

私は、玄関でさっきからずっと立ちすくんでしまっている自分に気がついた。そう、母の『いってらっしゃい』が聞きたくて…

『そんなんだから、二十歳になっても彼氏に逃げられんのよ』

落ち込んでいる私の背中を、母はそう言って思いっきり叩くのだった。

「いてーな、くそばばあ！」

私はそう照れ隠しに言ってみると

『あ～怖い怖い、これだから困るのよ、今時の若者は～、スカートの裾なんか短くしちゃって～それじゃあ、ねえねえ、おじさんパンツみてちょうだいって言ってるのと同じじゃない。』

母はそう言って私をからかってきた。

「……」

私はあまりの怒りに無言で玄関を出た。母はそんな私を、隣の意地悪ばあさんが微笑むようにニヤリと笑い

『いってらっしゃい』

と言った。

母は私を一人で育てた。どうやら私のお父さんと言うのが母の幼なじみで、これまた今世紀最大のダメ男で、母はそれを見かねてある日出て行ったと子供の頃、聞かされていた。でも、中学生になった私に、一度だけ母が私にお父さんの話をしてくれたことがあった。

『あの人はね、本当に何をやってもダメでね、仕事、勉強、恋愛はそりゃ～連戦連敗、側で見ている私の方が悲しい気持ちになることもあったわ。だからわたしが守らなきゃってある日思ったのよ。』

じゃあなんで離婚したの？と聞いてみたかったが、言葉が口から出なかった。そうして黙っていると母が静かに語り出した。

『でもね、あの人はとってもまっすぐだったの。それも今世紀最大に。だから好きだったの、だから別れなきゃってある日思ったの。』

母の言っている意味がよく分からなかった。そんなに好きならずっと側にいればいいのに。難しい連立方程式を解いているみたいな顔を私がしてみせると

『いいのよ、そのうち分かるから。』

母はそう言って私の頭をクシャクシャした。

今、母はいない。もうむこうの世界について、もしかしたら今頃この寂しげな私を見て、『元気だしなって、それともなに？あんたが同情してくれるわけ？これは、これは親孝行な娘だこと。』とでも憎まれ口をたたいているのかも知れない。

「うるさい！」

ひとりでそう玄関で叫んでみると、母のいないこの家がものすごく静かな事に気がついた。

母が死ぬ前夜、私は母から不思議な話をされた。

『いい、大事なのは側にいる事じゃないの。心のなかで大事な人とつながっていることなのよ。』

私は、なに説教たれてんだか、と流してしまった。

母の言葉が頭の中でこだまする。

『心のなかでつながっていることよ。』

私は今やっと母がお父さんと別れられたのか分かった気がした。そして私も母と別れなくては…

…

さみしい？

いや全然。

強がり？

いいえ、違うわ。だって私たちは大丈夫、

『心のなかでつながっているのだから。』

「心のなかでつながっているのだから。」

Last call

言葉は呪いだ。
想いは、言葉にした瞬間、歪められ、
言葉は、口から飛び出た瞬間、想いと切り離され、
そのたゆたう波は、誰かの鼓膜を揺する時、やはり捻じ曲げられ、
僕たちは、未来永劫わかりあう事はない。

それでも、伝えなくちゃいけないことがある。
それはきっと、とても原始的で本能的な願いで、
きっと、とてもシンプルな感情で、
誰しもに許された、まるで祈りのような欲望。

「会いたいよ」

もしこの世から旅立つ間際、一本だけ電話をかけることができるとしたら、あなたなら、誰に、何を伝えますか？
そしてなぜ、それを伝えるのを、その時まで待っているのですか？

A-7

――またか

くだらない。そいつを信じきったような幸せそうな顔でいるけど、俺はそいつが他の奴と一緒にいたのを知っている。いわゆる股かけしてるってやつだ。カマを振りかぶり、一閃。

「ねっ、それでさ・・・て、あれ？私どうして・・・ってそうか。今日なんか買い物したくて一人で来たんだった。誰に話しかけてんだろ私・・・」

そいつと一緒にいた奴が去っていく。なぜ人間は『愛』というものを手に入れたがるのだろう。なにが楽しくて他の人間を『愛』し、傷つけあうのだろう。なにが嬉しくて自ら争いの中に飛び込んでいくのだろう。そして、なにが悲しくてたかがそれだけのことに命を懸け、死んでいくのだろう。こっちの迷惑も考えて欲しいぜ。

俺は死神。人間には見ることのできない存在。死んでいった魂を運ぶのが俺達死神の仕事。だが、予定にない魂を運ぶのは色々と面倒臭いし、だからといってそこらに放っておくとまた問題になる。要するに、自殺した魂の処理が面倒なんだ。それでなくても生きる希望がないとかなんとかで自殺する奴らも多いってのに、たかが好きな奴に騙されてたとかふられたとか愛する人間が死んだとかで自殺する奴までいられちゃ、この上なく迷惑だ。

俺には他の死神とは違う能力がある。普通は魂を運ぶことしかできない。手に持つカマは、肉体と魂を切り離すだけの、ただの道具。死んだ人間の中から素質があるとして選ばれた者だけが、道具を渡され死神として活動を行う。しかし俺は初めから死神として存在し、カマを使い生きている人間を『消す』ことができる能力を持つ。もっと言えば、『初めから居なかった』ことにできるのだ。ゆえに、俺は本当の意味での死を導く死神として他の死神達からは恐れられ、『ディス』と呼ばれている。だが、むやみやたらと消していってしまっては、矛盾がたくさんでてきて訳の分からないことになってしまう。だから、すぐに周りの奴を自殺に導く危険性のありそうな奴らだけ、見つける度消すようにしている。本当は『愛』などに依存する奴ら全てを消し去ってやりたいがな。

今までに数え切れないほどの魂を運んで、数え切れないほどの人間をこの目に見てきた。そして数え切れないほどの人間の『想い』というのも見てきた。その想いそれぞれは、まあいろんな考え方があって悪くはないとは思っていた。

――どうでもいいがだが、未だにほとんどの人間の言う『愛』というものだけは理解ができない。僕には君だけが――、あなたさえいてくれれば――、そう言うくせに、簡単なことでさっさと崩れ、そしてまた次の人間へと同じセリフを吐く・・・本当にお互いが初めてで、そして最後まで一緒にいて天寿を全うする人間など、本当にほんの一握り、いや、ほんの一撮みだけだ。そういう奴らのいう『愛』ならまあ悪くはないと思う。だが一度他の奴を好きになって、んでもって付き合ったりなんかしていて、それでいてまた他の奴を好きになって・・・そんな繰り返しが『愛』だというのだろうか。そんなんにたった一度の命を懸けようとするのか。ばかばかしい。

『愛』なんて争いの火種にしかならない。ただそれを奪う為だけに、自らの物にする為だけに、今までに数え切れないほどの人間が死んでいったのだ。

――『愛』なんてもんがなければ、ミナミナ幸せで、ミナミナ平和なんだろうな。そしたらこっちもミナミナ平和で、俺ものんびりしていられるんだがな。まあ争い好きな奴らだから、なんだかんだいって互いを傷つけあうのが楽しいんだろうな。はっ、くだらない

結局信じられるのは自分だけ、可愛いのは自分だけ、一緒にいる相手を信じるのは表向きだけ、そうしとけば自分にとって都合が良いから、使えなくなれば捨てればいい、嫌になれば捨てればいい、自分に関係のないことなんかどーでもいい、後のことなんて知ったこっちゃない・・・見た感じ幸せ（？）そうな二人がいても、中身を見れば大抵そんなもんだ。正直者がバカを見る、とか、他人の不幸は蜜の味、とはよくいったものだ。運よく正直者同士になった奴らはさぞかし幸せだろな

――やっぱどうでもいいがな

また1組の男女を見つけた。ふざけたことに、どちらも何人もの人間と付き合っていた奴らだった。特に股かけはしてはいなかったが、今、色々と考えていただけに、非常にウザいと感じた。

――まあいっぺんに消せるから矛盾も少しは少なく済むし、時にはいっか

カマ、横一閃。

――消えろ

【ディス】

分かつ壁

本日は愛というテーマでひとつお話をしたいと思います

みなさん、本当に想い合う男女の仲はどんなことがあろうと引き裂かれることはないといいますが、果たして本当でしょうか。少なくとも私はそれを信じることができません。理由はいたって単純です。私のまわりに、もちろん私自身をふくめて、それほど強い絆でむすばれて男女をみたことがないからです。そして、どんなに二人が愛し合っていてもその二人を確実に分かつ物をしっているからです。

「それ」とはベルリンの壁？いや、もうありません。

「それ」とは北緯３８度線？いや、「それ」は地域限定のものではありません。

これらよりも恐ろしくて、憎むべきものが存在するのです。

「それ」とは、ある壁のことです。ベルリンの壁よりおそろしいのですから、それをこえることは当然犯罪であり、罰を受けます。また、ベルリンの壁をこえることはある意味英雄的側面をもっていましたが、この壁をこえたあとに待つものは社会的地位の失墜です。そして北緯３８度線より憎むべきものであるというのは、北緯３８度線よりも独善的につくられたためです。では「それ」とは一体何でしょうか。まあこれ以上隠してもしょうがないでしょう。皆さんもうすうす感付いているとは思いますが、発表します。「それ」とは・・・・そう、

お風呂屋さんの壁です。

どんなに想い合う男女もこの壁により分け隔てられてしまうのです。愛しあう二人がたった一枚の壁でひきはなされる、民主主義をうたうわが国でこのようなものが許されていいのでしょうか。そんなはずはありません。しかし幸いなことに、世論により、ベルリンの壁は崩壊し、朝鮮半島にも、統一しようという動きが見られます。そう、世論は国を動かすことができるのです。

さあ世の男性諸君、いまこそ立ち上がる時です。小さなことが世界を変えるのです。自由のために、自分のために、小さなことからはじめよう。

若年性アルツハイマー。
それは、彼女が患った「運命」の名前。

エコー　ECCO

初期症状としては、頭痛や目眩、不眠症、不安感、自発性の低下など。どれをとっても鬱病に間違えやすい症状のため、本人も周囲も、その発症に気付かないことがほとんどだ。
アルツハイマーと言うと、高齢者が患う病気のようなイメージがある。事実、大半は六五歳以上に発症するケース（アルツハイマー型老年認知症）である。一方で、十八歳〜六四歳までに発症するアルツハイマー症を、若年性アルツハイマーと言う。原因はβアミロイドによる老人斑及び脳の萎縮によるもので、特に女性の発症が多い。若年性の場合、遺伝によるケースも存在するため、親族などにアルツハイマー型認知症が居る場合は注意が必要である、云々。

そんな、他人事のような話。

それでも、彼女のように十代で発症するケースは非常に稀であると言う。そんなことを言われても、現状が打開される訳ではないけれど。
彼女と幼なじみだった僕に、その事実が知らされたのは、今から四ヶ月前の事だ。彼女のことをずっと見てきた僕は、何より彼女のことがずっと好きだった僕は、そんな事実、納得できるはずもなかった。
僕だって当時の彼女の様子に、若干違和感を感じたりはしていた。でも、そんな……そんな事、僕には受け入れることが出来なかった。

だが、その症状は次第に顕著になっていく。ちょっとした約束を忘れたり、咄嗟に人の名前が出てこなくなる。普段通っているはずの道が分からなくなる。
その頃には僕も、現実を受け止めるようになったんだと思う。不安で、押しつぶされそうだったけれど。

でも、一番辛いのは彼女だったんだろう。
一度だけ、彼女に聞いたことがある。
「……生きているの、つらく……ない？」
軽い気持ちで、こんなこと聞いたつもりはない。
その質問に、彼女はぴくりと反応した。
「……つらい、よ……でも」
繋いだ手を、彼女はぎゅっと握りしめる。
「君と……離れたく、ないから……」
右手のぬくもりと、やわらかい君の声。
失われていくのは、記憶と存在。
治療も空しく、症状は悪化していく。
過ぎ去る時間は、確実に彼女を蝕んでいた。
希望が霞んだ後に、残るのは空虚な現実だけ。

もう、分かっていた。
いつか僕は、そのぬくもりを失ってしまうのだろう。

そして、十八回目の彼女の誕生日。

僕は彼女の家を訪れた。
ドアが開いて、中から彼女が現れる。
僕が何かを言う前に、
彼女は虚ろな目で僕を見つめて、呟いた。
「君……誰？」
それを聞いた僕は、それを聞いて僕は、
何も言えないまま、何も聞かないまま、
持っていた花束を、その場に放棄して、
彼女に背を向けて、走って逃げ出した。
崩壊を始めた、彼女の世界。
後で、彼女は慌てて電話を寄越した。
泣きじゃくりながら、怯えきった声で
「ごめんね……」を繰り返す。
反響していく声は、心の奥に突き刺さっていく。
でもきっと……一番辛いのは、やっぱり君なんだ。
「こんなの……もう、イヤだよ……」
壊れてしまった空っぽの箱。涙で震えた君の声。
「君の居ない世界なら……生きてたくないのに……」
何も響かないような、虚ろな夜に溶けていく。

その日の午後十一時三九分、彼女は僕の目の前で、学校の屋上から飛び下りた。僕が呼んだ救急車で運ばれていった彼女は、搬送先の病院でまもなく死亡した。
僕はその一切を、ただ見ていただけだった。

エコー
残響していく記憶は最早過去のものだ。あの時の僕の行為が果たして正しかったのか、僕には分からない。
「見送って欲しい」彼女は僕にこう言った。
それが彼女の望みなのだとしたら、僕は叶えてあげたかったんだと思う。だから僕は、頼まれた通り彼女を夜の学校へ連れ出した。彼女が飛び下りるその時も、引き止めもせずに、ただその姿を見ていた。
彼女にこれ以上、生きることを強要して良いのか分からなかった。そこに偽善的な理屈なんて要らない。
「生きるべき」なんて言うのは、健康な人間の傲慢にすら思えたから。

だから、僕に出来ること。
「私のこと、忘れないでね」
飛び下りる直前の、君の最期の言葉。
忘却。そう、それは君が最も恐れること。
大丈夫、僕は忘れないよ。
僕が生きる限り、君は僕の中で生き続ける。
それが、君の望むことならば。
君の声は、もう僕には届かないけれど。
ここは君と僕の、二人だけの世界。

マイフェアレディ、ずっと一緒だよ。
Death Will Never Part Us
死が二人を分かつまで――――

ふたり

僕らは久しぶりに2人が二年前まで通っていた高校に来ていた。
「花火きれいだったね。」
「やっぱ近くで見ると迫力違ったね。」

二人は校庭に座り、思い出話に花を咲かせた。
文化祭、球技大会…

いつの間にか一時間が過ぎ

「今日二度寝、五回ぐらいしちゃった。」
「えー、五回もお？それって五度寝じゃん（笑）」

二時間が過ぎ

「じゃあ、ラピュタに出てくるムスカのフルネームは何でしょう？」
「えーと、なんだっけ、あー解んない！何？」
「私もわかんなーい。」
「おい！」

一通りしゃべりきってから、僕らは校庭に寝そべった。

「今、どの星見てた？」
「ん？あれ！あの私の真上にあるやつ！」
「あー、あれね。どっちかといったら俺の真上じゃね？」

こんなくだらない話に

僕は幸せを感じた。

ありがとう。それがキミの愛。

「俺なら、キミのことを絶対に幸せにする自信がある。いつでも待ってるから、肩借りたくなったらいつでも連絡して。」
こんなこと俺が、俺みたいなやつがどうして言えただろう。どこにもない自身が、キミには伝わっていたんだろう。。。
高校三年生の2月14日。その日のキミの一通のメール。それが、今の自分を作ったものだった。

「ねぇねぇ、渡したいものがあるんだけど。今日の17時頃大丈夫?」「今日外ひどくない?雨だけじゃなくて、風もやばいよ?」
「今日じゃないと意味がないでしょ?」「まぁ、いいけど。。。でもどうしたの?彼氏は?」
メールは返ってこない。約束の17時。外は季節外れの台風が来たかのような、ひどい風雨だ。外に出たくない。彼女が建物の屋根の下でびしょ濡れになって待ってるのが分かった。とりあえず、俺は走って彼女のもとへ向かった。
「はい。これチョコレートっ。」「ん?渡す人違うだろ?」「んーん。彼氏が会ってくれなくてさ。」「え…じゃあ、まぁありがと。」
せっかくだから、もらっておこう。俺はそう思い、受け取った。彼女は何も言わない。
「俺、今日勉強しすぎてつかれちゃった。どっか行こ?」「いいよっ。話したいこともあるし。」
彼女は私立単願だから、もう受験も終わってた。強い風と雨の中、とりあえず、地下に入ろうってことになったから、車の通る側に彼女を行かせないよう、ゆっくりと歩く。突然彼女が口を開いた。
「別れたっ。」「はっ??」「彼氏と別れたの。昨日。だからチョコレートも渡せなくなったからさ。」
突然の話に、俺は何も言葉が思い浮かばない。彼女は強いんだ。前からそれは知ってた。でも、今はすごく弱く見える。東の空は、地球の終わりのような、真っ黒い色だ。でも、西の空は変に明るい。彼女は笑っている。さっきと事情は違う。俺は、喫茶店に行くのをやめて、ビルの中の雑貨屋へと向かった。とにかく、今は忘れてもらおう。そう思って。。。
「ここ来たことない〜。」「面白いものいっぱい置いてあるでしょ?俺よく来るんだっ。」「そうなんだっ。見て?これかわいい!」
ふと外を見ると雨はやんだようだった。西の夕焼けが窓ガラスに即席のステンドグラスを作っている。
「ねぇ。ちょっと着いてきて。俺がいつも勉強で疲れた時に行くところ行こっ。」「え?うんっ。」
いつも、帰りによるビルの屋上。今日の夕焼けはなんだか違って見える。東の空の厚い雲を、一本の赤い光線が必死にこじ開けているようだ。そんな中、俺の手が、いつの間にか彼女を引きよせ抱きしめている。彼女は、黙って俺の肩に顔を押しあて、大声で泣き始めた。
「そんなに頑張らなくていいんだよ。肩くらい貸してあげる。」
そのままの状態で、どれだけ時間が経っただろうか。もう、いつのまにか19時だ。腫れた目をこすり、彼女は星を見上げて口を開いた。
「そいえば、星好きだったよね。私も大好きなんだ。。。ここいいところだね。星を見て一緒に泣ける人初めて出会った。」
気づけば、俺の目も熱くなっている。彼女は俺の手を取り、空を見上げている。きっと、彼女もあの星を見ているんだろう。
一番強く、一番弱く光る星。もはや、月に書いてある、『愛』という字はどうでもいい。あの星を見つめることが、俺のできる唯一の慰めなんだ。
「そろそろ帰ろっ。私も、受験終わったからって気が抜けないや。」「そうだね。俺、まだ受験生だった。」
俺たちは笑いながら元の道を歩き始めた。帰りの駅の前で彼女が小さな声で言った。
「何でも分かっちゃうね。さっき抱きしめてくれてありがとう。心地よかったよ。それじゃあまた学校でね。」
さっき見た星は、違う色で光り輝いている。

それから卒業式の時以外俺たちはまったく話すことはなかった。卒業式の後、俺は一通のメールを送った。
「彼氏とよりとか戻してない?もし、戻してないようだったら、俺と付き合ってくれないかな?」彼女からすぐにメールが来た。
「ありがとう。あの日のことはずっと忘れられないよ。だけど、今度こそは自分の足で踏ん張ってみたいの。だから、ごめん。」
「そっか……うん!頑張れよっ。」
最後に俺はこう付け足した。
「俺なら、輝美のことを絶対に幸せにする自身がある。いつでも待ってるから、肩借りたくなったらいつでも連絡して。」
今手元に残るのは「ありがと。」とだけ書かれた輝美のメールと、二人でとった卒業式の写真、それと遠くで一番光るあの星だけだ。

愛

「なあ、サトミ。俺この前ＡＢＣの歌作ったんだ。」
「へー、そうなんだ。面白そう、聞かせてよ。」
「いいよ。
♪Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ、Ｇ♪
♪Ｈ、Ｊ、Ｋ、Ｌ、Ｍ、え…」
「ちょっと待って。Ｉが抜けてるわよ。」
「ああ、Ｉはまだ入れてないんだ。だって」
「だって何？」

「これからお前とＩ(愛)を作って入れていくんだからさ。」

「もうっ、タカフミったら。」
「サトミ…」
「タカフミ…」

the end

コンテスト結果

[Aの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
A01	逢・愛・哀	0 pt	11 位	1 sp
		たわむれに自分で創り出した顔が涙の堰を切ってくれる。静かに泣くことで、少しずつ悲しみが体の外へあふれ出してゆく。それは一方で、自分に正直になる時間。自分の心をほぐしてゆく時間。 　そんなふうに、悲しみと、そしてそこからの立ち直りが同時並行で進んでいるように読みました。、悲しみを伝えつつも、きっと明日は晴れるよね、というほのかな明るみが行く先にふわっと灯ったような。しっとりと濡れた叙情が漂うラストセッションの表紙でした。 特別賞：敢闘賞（都合により）		
A02	White Month Festival	1 pt	9 位	0 sp
		なつかしいなあ。白月祭。今年のコラムニストさんたちにとって、あの頃、みんな若かった……と遠い目で語れるような共通の想い出のタームですね。 　今回、音楽という、とても言葉にしにくいものを、たおやかにつかまえて聴かせた前半の描写力がとりわけみごとだと感じました。 　そして季節は移りゆき……とその後の展開を見せつつも、敢えてまとめるのではなく、未来へと開いたラストもここちよくて。また、どこかで会いましょう！		
A03	Dreaming Lovers	1 pt	9 位	1 sp
		だ、だ、誰が予想したでしょうか。あのリストカッター氏が、ダークサイドをくぐりぬけ、こうしてほのぼの〜の境地に至るとわっっ（驚愕）。 　もとい、作品について。 　何だか、芝生の上でまどろんでいるような、でもこれ、どう見てもベッドの上ですよね。ベッドの上って、こんなに無邪気な（　二次元っぽい）世界だったかなあ。いかがですか、経験者のかたがた？ 特別賞：音読賞（お茶会で音読して下さい） イチオシフレーズ：「ちょっと何す」		
A04	『正直者のおじいさんの災難（正直者は救われない？）』	22 pt	1 位	3 sp
		改行なしで、ひといきに。あれよあれよと見ているうちに、ラストは鉈ですぱん。残酷なくらいの、このエンディングが痛快です。しかも、「おじいさんちょっと感動」と、ほのぼのさせた直後に容赦なくすぱん！　絶妙の呼吸でした。 　最後の覇者が最強の覇者！　レギュラーゼロポイントからの大逆転、おめでとう!!! 特別賞：塩味賞（他の甘ったるい感じの作品の中で一味違った）/貴重なギャグ賞（今回ギャグが少なめだったのでオアシスでした）/昔話賞（愛のテーマで昔話っぽく作った点が良い） イチオシフレーズ：「容赦なく鉈を振り下ろしましたとさ」		
		13 pt	3 位	1 sp

A05	玄関	本作における隠れた主人公は「今世紀最大のダメ男」と見た！ ほんと、姿を現さないで、母越しにぼぅっと浮かぶだけなのに、存在感が巨大です。 〈別れは愛の始まり〉、このいびつなカップルだからこそ、こんな逆展開がよく似合う気がしました。 「心の中でつながっているのだから」――ラストのリフレインが、いつまでもこだまします。愛チョコゲット、おめでとう！ 特別賞：ありがとう賞（すごい！オレ） イチオシフレーズ：「心の中でつながっているのだから」		
		9 pt	4 位	0 sp
A06	Last call	ひとつひとつのパートはバラバラな感があるのだけれど、何と言ってもラスト１行のインパクトが、すごい。すさまじい。 「なぜ、それを伝えるのを、その時まで待っているのですか？」　ぐさりと刺さって、答えに詰まる迫力でした。 イチオシフレーズ：「そしてなぜ、それを伝えるのを、その時まで待っているのですか？」×２　「会いたいよ」		
		5 pt	8 位	2 sp
A07	ディス	やさぐれ死神さん。ウザいのひとことで、ばさばさ消しちゃうなんて、なんてまあ、ヒドいおかた。 そのやさぐれぶりは十分に伝わってきましたが、ディス氏がなぜにこのようなナナメな感覚を有するに至ってしまったのか、心の闇、過去の履歴などちらりと見せていただけるとより深まった気がします。 だいたいねえ、二股三股くらいで人死になんて、そうそう出やしないのさ――と、これはオトナのセリフ。 特別賞：山本賞（A12とコンボ）/ケンカ売ってるで賞？（他の作品の殆どにケンカ売ってるよね） イチオシフレーズ：「――消えろ」		
		7 pt	5 位	1 sp
A08	分かつ壁	ふつう、お風呂屋さんオチで終わるところを、さらに呼びかけへと展開した工夫が勢いのあるラストになって成功しています。 世界的な大問題と、身近なお風呂屋さんを強引にくっつけたミスマッチが、おかしみを醸し出してGOOD。 特別賞：男性党賞（立ち上がって、壁をブッコワセ!!） イチオシフレーズ：「小さなことからはじめよう」		
		18 pt	2 位	0 sp
A09	エコー　ECHO	何より恐いのは忘れてしまうこと――そんな人間の根源的恐怖を、病気に託して描ききって、しんしんと身に迫る悲しみでした。 午後11時39分、ただ見ているだけだったその瞬間。忘れないよと約束しつつ、言葉も記憶も日々に風化してゆく運命。それでも「ずっと一緒だよ」と信じたい気持ちが、こだまするラストでした。グレイト！ 愛チョコゲット、おめでとう!!		
		7 pt	5 位	1 sp

A10	ふたり	べただ。しあわせ感満開。 何の話をしたかなんてどうでもよくて、一緒にいるだけでしあわせ、という人生の機微をしっかりつかまえたところ、なかなかの哲学者であります。 特別賞：幸せそうで賞 イチオシフレーズ：「あー、あれね。どっちかといったら俺の真上じゃね？」
A11	ありがとう。それがキミの愛。	0 pt / 11 位 / 0 sp いやふつう、チョコを使い回したりしないでしょう、乙女のモラルとして。 そんな究極のお人好しさん。届かずに終わることを運命づけられた想いのせつなさ。 それでもウラミ節にならずに爽やかなのは、きれいな風景をひとつひとつていねいに見せてくれた筆づかいのおかげかと。 イチオシフレーズ：「西の夕焼けが窓ガラスに即席のステンドグラスを作っている」
A12	愛	7 pt / 5 位 / 5 sp バカップル。典型的。 赤面しながら執筆したと推定。A11のチョコと合体させて、賞品ネタにおいしくいただきました。ごちそうさまっ。 スバラシイ破壊力にて、最多特別賞とイチオシフレーズ大賞ゲットです。おめでとう＆すえながくおしあわせにっ。 特別賞：勝手にやってろ賞/ばか賞（究極にバカな感じがよい）/日本レコード大賞（面白そう、聞かせてよ）/タカフミ賞（the end これが効いてる）/おいっ!!賞（つっこみたくなる） イチオシフレーズ：「これからお前とI（愛）を作って入れていくんだからさ」×２　「もうっ、タカフミったら」×２　「サトミ…」

[Bの部]

コラム番号	コラムタイトル	点数	順位	特別賞
		まじょコメント		
B01	恋する者へ	5 pt	5 位	0 sp
		あい、という言葉の響きがきれいに耳にこだまして、まさに表紙向き。 せっかく「相」が出てきたので、相思相愛へつなげても良かったか、と。		
B02	～XXX～	2 pt	12 位	2 sp
		季節感は置き去りにしても、やっぱり二人が結ばれるのはイヴじゃなくちゃね。 バイトの光景、展望台へとつないでラヴコメ。照れずに駆けぬけるのが吉。おしあわせに。 で、特別賞で突っ込まれてますが、XXX　の意図は？ 特別賞：卑猥賞（XXXを辞書で引いてみよう!!）/XXX賞（ジーニアス英和より わいせつ度がいちばん高いポルノ映画）		
B03	二人の愛	22 pt	1 位	0 sp
		いやもう究極の自己犠牲ですね。そして、ふたりは、それぞれの形において「しあわせ」を手にした、と。「二人の愛」が二人の間の愛ではないという皮肉な結末が、ぐさりと心に刺さります。 日本語を母語としていないにもかかわらず、骨太のストーリーを立ち上げて最終セッションをみごとに勝ち取った彼に熱い拍手!!!		
B04	負けない心	3 pt	8 位	0 sp
		告白セリフの眩しさが燦然と輝いて、ストレートな愛がひしひしと伝わってきます。 これだけストレートに告白されたら、よっぽどカチカチの女心でもなびくだろうなあ。		
B05	Elizabeth Taylor	3 pt	8 位	0 sp
		なぜにエリザベス？　が謎。 雨、自殺した女、ハードボイルド。いつもながら描写力全開で、びしびしたたき込んできます。「人でいることをやめ、モノになった」なんて、なかなか出てこないフレーズでしょう。さすが。		
B06	愛を感じた瞬間	3 pt	8 位	1 sp

		文字の大きさが、よろこびの大きさ、なのでしょうね。 禁断の世界へようこそ。 なるほど、愛の鞭、って語源はそこか！　（ぉぃ 特別賞：裏の影響受けたで賞（おもしろいけど裏の影響が）
B07	ー恋文ー	4 pt　6 位　1 sp ラストでうわ〜〜！ 気色悪さ全開。うん、たしかに食事をともにする胎内パートナー、人体に危害は及ぼさないし、リクツは通ってる。 この作品のおかげで、今週の賞品が高野豆腐に決まりかけたのは内緒です。 特別賞：寄生虫してるで賞（サナダムシの性質に沿った恋文の流れ文運びがけなげでGood） イチオシフレーズ：「高野豆腐」
B08	最終最初チルドレン	16 pt　2 位　4 sp アンドレ、インク無駄遣いの子。 添削をウラに書いたなんて、初めてです、ったく。 でも、おもしろかった！　カケラだけなのに、しっかり浮かび上がるストーリー。映画予告編を進化させると、こんなになるんだ。 フレーズをこなごなに砕いても、パズルのピースさながら、人の物語希求力はしっかりストーリーを構築する。ならば、きしょーてんけつ、なんて、お行儀よくつながりやまとまりや着地点を気にしなくても、もっと破天荒に、もっと傍若無人に、もっと自由自在にコトバを操ることが可能なのでは？　という言語表現の限界への挑戦と読みました。 壇上死守のみならず、最多特別賞もさらいましたね。おめでとう!! 特別賞：努力だけは認めてやるよ賞（大変そうだった）/デザイン賞（努力は見える）/手が汚れるで賞/インクをたくさん使ったで賞 イチオシフレーズ：「迫り来るガチャピン」×３　「自律型警備ロボットトトロ」（マリオ等とセットで）　「謎の男マリオ」×２
B09	花	3 pt　8 位　0 sp 受け身の聞き役だったサボテンさんが、突然物語に参加してくる後半がすごいです。 なるほど、こんな愛もあり、ですね。 いじましい蕾ならいっそ捨ててしまおう、一からやり直すために。ささやかなサボテンのささやかな決意が、しっかり心に刺さりました。
B10	あぁ愛まみれ・・	16 pt　2 位　1 sp 読みにくいフォントが難だけれど、これでもかこれでもかこれでもか、とネタ切れを恐れずに、たらたらたらたら続けた、このエンドレスなぐだぐだ感がユニークでした。 でもって、激論の末、今週の賞品はマヨネーズに決定！　Aブロックはチョコなのにね。そのネタ元さんに賞品を差し上げられて、良かった良かった。 特別賞：愛知はエロいで賞（「むしろ逆だ」とかあるから、０イエスは絶対ありえないじゃん） イチオシフレーズ：「ローズが」「じん帯が切れてしまえばいいのに」「愛知より愛媛の方がエロい」
B11	ずっと二人で	9 pt　4 位　3 sp 原点回帰のtogehter。女の子視点が新趣向。 いやもう、音読してくださいね、と強要せんばかりの後半の加速っぷりにブラボー！　togetherのひとことが炸裂しまくって、イチオシフレーズ大賞も攫いました。おめでとう！ 特別賞：甘い賞（満場一致）/何げにうまい賞（togetherはよくがんばった）/トリ肌賞（ぞくぞくする） イチオシフレーズ：「together」×５ 「燦然と輝く時の道」
B12	『数学と哲学』	4 pt　6 位　3 sp 深い。 虚数にリンクさせて、あざやかに警句。たしかにね。 ここまで悟ってしまったら、もうあとがない。だから、今年の読み納めです。 特別賞：東工大で賞（実際、虚数がなくても生きていけると思う）/アイをかけあわせたらマイナスで賞（ただ上手かった）/富沢賞（教科書化決定、全米が学んだ） イチオシフレーズ：「アイとは虚なものだが……」